

東京電力・福島第1原発

4号機建屋が完全倒壊の危機

現職の東電関係者が爆弾

本紙はこのほど、福島第1原発構内で従事している現職の東電関係者から取材を行ない、驚くべき事実をつかんだ。4号機の建屋が倒壊寸前だという。こんな危機の最中に経産相が発した「原発再稼働宣言」は、ベテンのものだ。

(田中みのる)

「4号機の原子炉建屋は、福島第1原子力発電所の構内で従事している現職の東電関係者は本紙の取材に対して、こう語った。

◆過重量で危険が

東電関係者は4号機原子炉建屋の最上階である5階フロアの現状について次のとおり、指摘した。

「3月11日の大地震時、

4号機は他の号機と異なり、長期大型の定期検査の最中だった。つまり、RPV(原子炉圧力容器)のシールド(内部隔壁)は切断され、5階のDSピット(仮置きするプール)内に移動されていた。その5階には、通常設備の他に改造に伴う仮設の移動クレーン、切断機器が設置され、フロア耐過重は通常の状態より、かなりの負荷がかかっている。構造上、極めて

危険な状態にある」

3月15日、4号機原子炉建屋の爆発が発生し、オペレーションフロア1階下から上部全体および階段沿いの壁面が破損し、4階北西付近では火災が発生した。最上階である5階部分には定期検査のため大量の機械・機器が持ち込まれていたが、火災で焼け焦げたまま現存している。

定期検査のため持ち込まれた日立製の仮設移動クレーンの重量は推定で数百ト。その他、持ち込まれた切断機器等もろもろの機器を合計すると、とんでもない重量なのだ。

東電広報担当者によれば

「鉄骨で補強作業中」とのことだが、「あの程度の補強では全然足りない」(東電関係者)と一蹴する。

さらに東電関係者は「地震発生時、4号機で定期検査中の作業員から建屋自体が部分的に崩れたとの証言を聞いた。津波が襲ってくる以前に、すでに地震自体で機能がまひしたとみるのが自然だ」と語った。

また、東電関係者は「これまで多くの技術者が福島第1原発の構造上の問題に疑問を抱いてきた。しかし、東電と原子力安全・保安院の癒着は甚だしく、全く聞く耳を持たない。構造上の根本的な問題はタブーですよ。指摘しようものならすぐ左遷されてしまします」と同社の隠ぺい体質を指摘した。

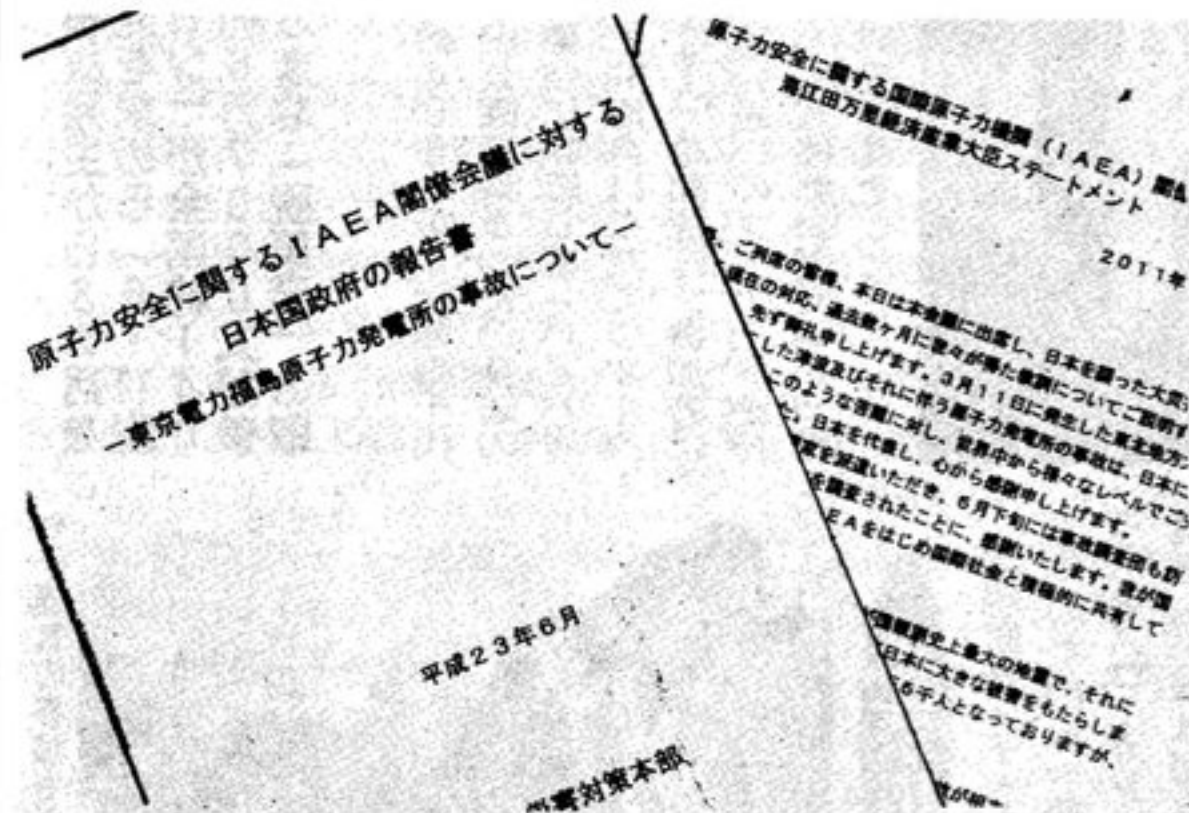
「二枚舌」の菅政権

「二枚舌を使う菅政権にはシビアアクシデント(過酷事故)をハンドリングする資格はない」。民主党関係者は、吐き捨てるように批判した。

海江田万里経産相は早々と6月18日、福島第1

原発利権にうごめく者たち

第4弾



↑IAEAに提出された日本政府の報告書(右)と海江田大臣の報告(左)は耐震問題で矛盾する。

パリン

が爆弾証言

「鉄骨で補強作業中」とのことだが、「あの程度の補強では全然足りない」（東電関係者）と一蹴する。

さらに東電関係者は「地震発生時、4号機で定期検査中の作業員から建屋自体が部分的に崩れたとの証言を聞いた。津波が襲ってくる以前に、すでに地震自体で機能がまひしたとみるのが自然だ」と語った。

また、東電関係者は「これまで多くの技術者が福島第1原発の構造上の問題に疑問を抱いてきた。しかし、東電と原子力安全・保安院の癒着は甚だしく、全く聞く耳を持たない。構造上の根本的な問題はタブーですよ。指摘しようものならすぐ左遷されてしまいませんか」と同社の隠微い体質を指摘した。

「二枚舌」の菅政権
「二枚舌を使う菅政権にはシビアアクシデント（過酷事故）をハンドリングする資格はない」。民主
党関係者は、吐き捨てるように批判した。

海江田万里経済産業相は早々と6月18日、福島第1

切で正しかった②国際社会への日本政府の対応は非常に公開性に富んでいる——と日本政府の対応にお墨付きを与えてしまった。原発推進を基調とするIAEAという組織そのものの限界性をあらわにした。

同20日、ウィーンで開かれたIAEA（国際原子力機関）の閣僚級会合で海江田経産相は、津波の高さへの備えや冷却方式・電源の多様化、水素ガス爆発の防止策、原子力安全・保安院を経産省から独立させる、など改善点を表明した。

実は、海江田経産相の報告の主旨は、①原発は大地震に直面したが壊れず非常用電源も作動し体制が発動した②津波は想定をはるかに超え地震で生存したシステムも津波で機能不良となり、つまり日本の原発はきちんと機能していたが、たまたま「想定外の津波」で機能がまひしたと結論付けた。

この経産相報告とまるで歩調を合わせるかのよう
に、IAEAの天野之弥事務局長は同日、「震災後の日本の対応は取り得る最善の措置であった」と手放しで
メールを送った。IAEA
訪日調査団の報告書（6月
1日付）でも、①大地震後に
日本政府の取った措置は適

別の記事にも見られた。原



↑福島第1原発4号機原子炉建屋への注水作業（3月22日撮影、東京電力ホームページより）。

馬淵補佐官が示した「福島原発事故対応における中長期対策チームの取組み」と題する文書の「中長期対策チームの取組み（4）」余震対策①には「4号機原子炉建屋の壁については大きく損傷しており、この状態における健全性を確認するため、原子炉建屋の耐震性評価を実施。あわせて、安全裕度の向上のため、使用済燃料プールの底部に支持構造物を設置する」とある。

津波以前に倒壊か
これと同じような記述は別の文書にも見られた。原子力災害対策本部が同月にまとめた「原子力安全に関するIAEA閣僚会議に対する日本政府の報告書——東京電力福島原子力発電所の事故について——」と題する文書には次のとおり記されている。

「福島原子力発電所で観測された地震について、福島第1原子力発電所においては、原子炉建屋基礎盤上で観測された地震動の加速度応答スペクトルが、一部の周期帯で設計の基準地震動の加速度応答スペクトルを超えた」
この記述は暗に地震によって4号機を含む原子炉建屋の基礎が壊れていたことを示唆している。そうになると、経産相の報告とは明らかに矛盾してくる。日本政府の原子力災害対策本部が、津波の来る前に地震により原子炉建屋が崩れたことを認めておきながら、経産相の報告では、福島第1原発は大地震に直面したが壊れず機能していた、と言っている。
前出の民主党関係者は怒り心頭に発して語る。「これは極めて重大なペテンだ。細野補佐官の報告書と海江田大臣の報告は完全なるダブルスタンダード。これでは事故対応の前提条件である『安全文化』など根付くはずもない」

プルトニウムを貯蔵した原発再稼働宣言